

# 京都建築事務所

想いをカタチに、想い以上の感動を



株式会社 京都建築事務所  
代表取締役社長 細見 建司

〒604-8083

京都市中京区三条通柳馬場東入  
中之町 10 番地

TEL:075-211-7277

FAX:075-211-7270

<http://www.kyoto-archi.co.jp/>



医療福祉施設の新築、増築、改修等、お気軽にお問合せください。

## 2024 年度も 総合社会福祉研究所会員 福祉のひろば読者 の継続をお願いします。

軍拡と社会保障の抑制で国民の生活をないがしろにするいっぽう、自分たちは堂々と裏金を受け取り私腹を肥やす政権に対し、国民の支持率は最低を記録しつづけています。いのちと暮らしを守る社会保障・社会福祉の充実が不可欠であること、ケアこそ社会の柱であるという世論を、よりいっそう広げていく活動を、次年度も会員・読者のみなさまとつづけていきたいと考えています。

つきましては、2月頃より、「2024年度会員・読者継続のお願い」をお送りさせていただきます。会員・読者の継続を、よろしくごお願い申し上げます。

総合社会福祉研究所 個人会員 9,400 円（税込み）

福祉のひろば 読者 6,600 円（税込み）

\*\*\*\*\*

総合社会福祉研究所 TEL06-6779-4894 FAX06-6779-4895

<http://www.sosyaken.jp/> E-mail: [mail@sosyaken.jp](mailto:mail@sosyaken.jp)



# 1人ひとりの生命が大切にされる社会をもとめて

—— 日本母親大会in山口、山口短期大学、こころの銭湯、まんまある訪問 ——



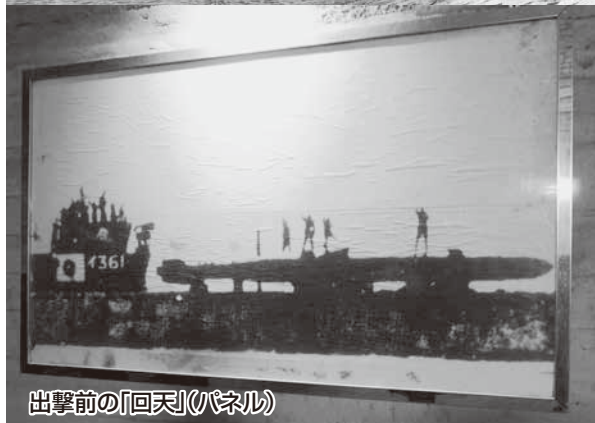
記念講演の講師・清末愛砂さん



山口県母親大会連絡会のブース

2023年11月24日から27日にかけて、山口県にうかがい、いろいろな人とその活動に出会ってきました。25日・26日には、山口市で開催された第68回日本母親大会in山口に参加。大会テーマは「生命を生み出す母親は 生命を育て 生命を守ることをのぞみます」。1955年の第1回大会は、日本のマグロ漁船・第五福竜丸がアメリカの水爆実験により被災した事件をうけて開催されました。以来68年にわたり、全国の都道府県や地域単位で母親大会が開かれています。今大会は2日間合わせて約12000人が現地会場とオンラインで参加し、開催地・山口県をはじめ、全国でくりひろげられている平和と暮らしを守る運動が交流されました。

人間魚雷「回天」の訓練基地跡。全国でここにしか残っていない



出撃前の「回天」(パネル)



整備工場から訓練基地へ  
「回天」を運ぶトンネル



ボランティアガイドの説明を聞く参加者

27日は母親大会のオプションツアーで<sup>おおつしま</sup>大津島へ。大津島には、終戦の1年前に人間魚雷「回天」の基地が建設され、今も施設の跡が残っています。「回天」は、魚雷にちいさな操縦席をつけ、敵の艦船に搭乗員ごと体当たりする「海の特攻」。秘密の兵器なので、体当たりにも失敗しても自爆することを命じられており、一度出撃すると生きて帰ることはできませんでした。搭乗員に「志願」した兵士は1,375人にのぼり、その平均年齢は約20歳。いったい何が彼らを「特攻」に駆り立てたのか？ 参加者のみなさんと話し込みました。





銭湯だった頃のロッカーやのれんが活躍しています



こころの銭湯「まんまある」入口



すてきな絵手紙ができました



みんなで公園に行こう！

ほうふ  
防府市では、「まんま会」を訪ねました。30年前に閉店した銭湯を、ボランティア・有志の手作業でつくりかえて拠点とし、月1回ペースの子どもの居場所「まんまスクール」のほか、さまざまなイベントを開催されています。今回は「まんまスクール」に参加させていただきました。5年生の子どもを送ってきたお母さんに聞くと、「本人が『まんま（スクール）に行きたい』というので来ています。私はここでいろんな人に会って、いろんなことを体験することが、子どもの生きる力を育てることになると思っています」と話してくださいました。

山口短期大学・正長ゼミのみなさん



児童養護施設・シーノースガーデンの玄関

山口短期大学では、当研究所会員である正長清志先生しょうながきよし（児童教育学科）の2年生の講義に参加させていただきました。就職に向け、進路を決めた理由や今不安に思っていることなど、率直な思いを聞かせていただきました。また、児童養護施設・防府海北園の小規模施設「シーノースガーデン」をたずねました。小学校の真ん前にあるとってもおしゃれな「おうち」です。

世界のあちこちで戦火があがる状況のなかで、「生命を育て、守る」とはどういうことなのか、私たちに今できることは何なのか、お話を聞き考え、話し合う貴重な時間をいただいた今回の取材については、本誌でいろいろなかたちで紹介していきます。  
(編集室 中島素美)

●特集● 民主的な経営ってなに!?  
経営実態調査にとりくんで見えてきたこと

2006年にはじまった経営実態調査	堤 昭子	12
「権利としての社会福祉」を守るための経営とは	皿海みつる	14
人材育成にもつながる活動に	瀧川 裕樹	16
民主的な経営指標とはなにか、模索しつづける	山本 匡人	18
数字の裏側にある現場の実態に目を向ける	高倉 弘士	20
～討論～		22

●トピックス●

ウソと闇と泥まみれの夢洲万博・IRカジノ	藤永 延代	30
「人手不足を感じる」が93%——福祉職場の意識調査	土田 昭一	36
年賀広告		42
第36回社会科学・社会福祉基礎講座 修了しました!		45

●連載●

世界と交流する平和の船に乗ってみた!

第5回 海洋汚染から海を守る 根津真澄+オット 48

WORK WORK——わくワク——

世界に1つのネクストラップ ほっと・館ぶらす・わん 52

婦人保護運動のこれまでとこれから (11) 雪田 樹理 54

女性支援法を生かすために～国・行政のあたらしい動き～

ケア労働処遇改善キャンペーン! (19)

障がい当事者の地域生活とケア労働者の処遇改善 棚原喜美枝 58

JOB&ACTION 全国福祉保育労働組合 (35)

福祉人材確保指針を政治課題に押し上げ処遇改善と職員増を! 60

私の履歴書 社会福祉経営全国会議 (35)

福祉の奥深さ修行中 平松 知子 62

阿修羅がゆく わたしが好きな釜ヶ崎 (55) 水野阿修羅 64

相談室の窓から 息子を信じて 青木 道忠 66

育つ風景

年長クラスの“超楽しい一日”をみんなでつくる 清水 玲子 68

映画案内 山田太一追悼 吉村 英夫 70

現代の貧困を訪ねて 生田 武志 72

「いのちのとりで裁判」の11・30名古屋高裁判決

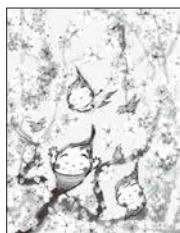
似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート

新春 似顔絵福笑い大会～! ラッキー植松 74

ホームレスから日本を見れば ありむら潜 76

花咲け! 男やもめ 川口モトコ 77

●表紙の絵●  
神門やす子





# 社会運動は 個人の身近な生活 「日常」にある

立命館大学産業社会学部准教授 富永 京子

気候変動や労働環境といった社会的な問題に関心をもち、デモや集会、政策提言といったかたちで声を上げる「人々」の研究をしています。いわゆる「社会運動」の研究ということになりますが、日本は社会運動に参加する人がかなり少ない社会ですので、たとえば近所に住む方や自分の親族に言っても、わかってもらえないことが多いです。

社会運動の研究をしている人は、もともと運動をやっていた人が多いのですが、私はまったくそうではありませんでした。地方都市の出身なので、デモも高校生くらいのときにはじめて見たくらいです。社会運動は参加者も少なく、発生件数がただでさえ低いうえ、政党や議員との接触も多い活動ですから、政治についての意見表明が忌避されやすいとされる日本では、なおさら縁遠く感じる人が多いのかもしれませんが。聞き取り調査などをしていても、「よくわかんないし見たこともないんだけど、なんとなくハードル高そうなもの」というのが、日本に住む人々の多くがもつ社会運動のイメージとして根強いように思います。ただ、私たちの家庭でのやりとりや、職場での発言、友人への励ましや慰めの言葉が、すでに社会運動である、と教えてくださったのは、私が一〇年以上交流してきたアクティビストの方々でした。

生活の一つひとつが社会運動である、という平凡な表現になってしまっていますが、そのことをとくに強く思ったのは、出産してからのことです。職場や家族、友人との関係において、要求することがずいぶん増えました。たとえば、職場であれば会議をリモー



## とみなが きょうこ

1986年生まれ。日本学術振興会特別研究員などを経て、現在、立命館大学産業社会学部准教授。専攻は社会運動論。社会学的視角から、人々の生活における政治的側面、社会運動・政治活動の文化的側面を捉える。著書に『社会運動と若者』『社会運動のサブカルチャー化』『みんなの「わがまま」入門』など。

トで参加させてほしいとか、友人であれば夜の飲み会より昼のアフタヌーンティーがいいとか、そういった事柄です。そのたびに配慮をお願いしているような気がして申し訳なく、嫌われるんじゃないかとか、厄介な従業員だと思われるんじゃないかとか、そういうことがやけに気になるようになりました。他人の要求ならば、そんなこと微塵<sup>みじん</sup>も感じないので……。

こうした「配慮を要求すること」は、権利を獲得するための社会運動の基本です。だからこそ、その要求にともなう「申し訳ない」という感情もまた、社会でいうマイノリティと呼ばれる人々が常に抱いてきたものでもあるでしょう。こうした要求を聞く立場としては、「そんなに申し訳ないと思わないでいいのにな」で済ませていたのですが、する立場になってはじめて、要求というのは、社会運動というのは、こんなに勇気が必要なのだとはじめて知った気がします。

私がありがたかったのは、配慮を要求したときに、「自分も同じ意見だ」とか、「どんな要求してくれ」と言ってくれた人々がいたことです。こうした一言によって、要求する勇気の重みを減らすことができるなら、声をかけることだってそれなりの社会運動になるはずですよ。そう考えると、社会運動は案外遠いものではないのかもしれない。



# 社会福祉の研究・活動団体に求められる役割

総合社会福祉研究所では、毎年八月に社会福祉研究交流集会を開催し、今夏は関東で開催すべく、現在鋭意準備中です。この研究交流集会には、福祉のしごとに就いて一年目の職員さんから管理職の方々、研究者、学生と、さまざまな方々が参加されます。福祉現場の余裕が奪われ、学習したり研修会に出る体制の余裕も心の余裕もなくなっているなかで、自ら進んでというよりは、職場の研修として声をかけられて参加される方も少なくないと思います。今号のトピックスで少し紹介している「社会科学・社会福祉基礎講座」についても同じです。こうした当研究所の活動に共通しているのは、「最初はいやいやだったけれど、参加してみたら学びが多かった」「ほかの法人・分野の人たちと交流できて視野が広がった」「自分の施設や現場だけ見ていたらダメだと気づいた」という感想です。

『福祉のひろば』としても、情報発信だけでなく、企画や取材、原稿執筆に、福祉現場の職員さんたちにかかわっていただくことも大切にしてきました。ご協力いただく職員さんにとっても、送り出す施設側にとっても、そうした活動に充てる時間を確保することは、どんどんきびしくなっているのが実態です。

そうしたなかで、私たちとしても、以前のように現場のみなさんに企画を呼びかけることに躊躇ちゆうちゆうしてしま  
う向きもあり、そこにコロナ禍が覆いかぶさって、いっそう「施設の外に出る活動」をつくっていくこと  
がむずかしくなっていました。

しかし、それではダメだということを、今号の特集にご協力いただいた「一般社団法人社会福祉経営全  
国会議（以下、全国会議）」の活動や、かかわっているみなさんの思いをうかがって、あらためて感じて  
います。法人や分野を超えた全国会議や総合社会福祉研究所の活動には、その活動にかかわることそのも  
のに、人材育成の意義があるからです。目の前の利用者さんの支援、日々の業務をこなすことにいっばい  
いっばいになっていいる若手の職員さんに、「自分の悩みは自分だけではないんだ」「外に目を向けることも  
大事なんだ」と感じてもらえること、そして、自分の職場の状況を一步引いて見ることができる職員さん  
を増やしていく役割が、研究所や『福祉のひろば』には大いに求められていると思います。不適切な支援  
や虐待事案があとを絶たない背景にはさまざまな要因がありますが、施設の外に目を向ける機会が奪われ  
ていることも、ひとつの大きな要因ではないかと感じています。

労働者の処遇も利用者の権利も守る。利用者も労働者も、被害者にも加害者にもさせない。そうした福  
祉事業を守っていくために、当研究所としてすべきこと、求められていることを、あらためて考えさせら  
れる特集となりました。

（編集主任 申）